

富山県立富山中部高等学校 平成26年度学校総合評価

6 今年度の重点目標に対する総合評価

「学力の向上－アクションプラン1－」の②平日の平均家庭学習時間は3.5時間となり目標4時間以上に達することはできなかった。また、「進路意識の高揚と進路希望の実現－アクションプラン2－」の②希望する進路の実現を果たした生徒の割合は目標50%以上に対して42%にとどまった。しかしながら「学力の向上－アクションプラン1－」の①互見授業・教科別授業研究会の実施回数、「進路意識の高揚と進路希望の実現－アクションプラン2－」の①大学探訪・進路講演会での満足度、「読書指導・体力の向上－アクションプラン3－」の①広報活動・読書指導、②持久走での自己記録更新、「学校行事・部活動の充実－アクションプラン4－」の①体育大会での充実感、②部活動での充実感、「「探究力」「科学的思考力」「自己発信力」の育成－アクションプラン5－」の①野外実習・大学実習・課題研究の満足度、②海外研修での参加生徒の充実感・保護者の肯定感は当初の数値目標を達成した。

学力向上の重点課題である家庭での学習時間の確保については、平日の家庭学習時間4時間以上の目標に対し、3年生は4月3.5時間、9月4.1時間、2年生は4月3時間、9月3時間、1年生は4月3.6時間、9月3.3時間であった。3年生は2学期になりようやく学習時間の増加が見られたが、1・2年生は減少あるいは横ばいであった。昨年度より、課題を精選し自主的な学習を促す指導を行っているが、これまで以上に生徒に自主的・主体的な学習の姿勢が定着するよう工夫の必要がある。

一方、本校は本年度スーパーサイエンスハイスクールに指定され、大学実習・野外実習などさまざまなSSH事業を計画的に運営・実施するとともに、7月には新しい学校行事として第1回海外研修を実施した。大学実習・野外実習などの満足度は平均95%であり、また海外研修の充実感・肯定感はほぼ100%となり、初年度の事業としては十分に成果を上げることができたと考えられる。

今後とも、生徒・保護者・地域・社会の期待に応え「全国を代表する優れた人材の輩出校であり続ける」ために、「計画・実行・検証」の学校評価システムを確立し、充実した教育活動を展開していきたい。

7 次年度に向けての課題と方策

本年度は新教育課程で学んだはじめて卒業生であったが、その進路結果等を踏まえて新教育課程にふさわしい生徒の学習意欲を高める学習指導や高い意識を持たせる進路指導について、さらなる検討を加えていきたい。

生徒の学力向上を目指すことはもちろん、学校行事や部活動の充実を継続して図り、健全な心身・優れた知性・豊かな情操を培い、民主的で自主性・創造性に満ちた人間の育成に努めていきたい。

(様式5)

平成26年度 富山中部高等学校アクションプラン			－ 1 －
重点項目	学力の向上		
重 点 課 題	○授業の水準を高める。 ○家庭での学習時間を確保させる。		
現 状	○授業力の向上を目指して互見授業等を行い、教科別授業研究会の充実を図っている。 ○生徒の学習意欲を高め、家庭学習時間を確保することが課題である。		
達 成 目 標	①互見授業を行い、授業力の向上を図るための教科別授業研究会の実施回数	② 平日の平均家庭学習時間 ＊生活実態調査による一人あたりの平均学習時間とし、全学年を対象とする。	
	各教科年間2回以上	4時間以上	
方 策	○互見授業を全教員に対し公開する。 ○互見授業終了後、教科別授業研究会を開催し、1～3学年を見通した指導法を築き、指導目標を共有する。 ○定期的に生徒の学力や学習実態を分析し、授業方法の改善を図る。	○家庭学習時間の少ない生徒に対し、教科担当者や担任による個別指導を行う。 ○自学自習を促すプリントや、発展的課題を与えるなどし、主体的かつ意欲的に学習する習慣を身につけさせる。 ○新入生合宿で高校での学習法をしっかりと身につけさせる。 ○定期考査までの短期間の学習計画を示すなどして、「自学自習」の実践を指導する。 ○学習時間が足りている生徒に対しても、具体的な学習内容等について適宜アドバイスをを行う。	
達成度	各教科年間2回以上を実施 (家庭科、情報科を除く)	3.5時間	
具体的な取組状況	《互見授業》 ・1学期と2学期に各教科で互見授業を実施し、その後教科協議会を持ち、互見授業を基にして授業力向上に向けた指導法の研究を行った。また定期考査や外部模試の結果から、各学年の学力分析を行い、補強すべき点や課題の与え方等について協議した。		
	《学習時間の確保》 3年 ・昨年度から引き続き、「国公立二次対策講座」や「基礎講座」を開設し、「難関大学講座」と併せて日程を調整し、生徒個々に応じた指導を行った。 ・個別大学添削指導を昨年度から、全職員で分担して取り組んでいる。開始時期は、教科によって二学期から本格的に取り組んだ。 ・個人面接を定期的に行い、家庭学習時間の短い生徒に対しても、面接を通して学習法や時間の使い方等を指導した。 ・課題を減らす事で生徒が自由に学習できる時間を確保し、個々の生徒が持つ弱点克服を図った。 ・平日の学習時間は、4月が3.5時間、9月が4.1時間 ・平日4時間以上学習している生徒は、4月で32%、9月で63% ・平日2時間未満は、4月で7.0%、9月で4.5%		
	2年 ・朝早くから登校する生徒も増え、自ら課題を見つけて学習に取り組むようになった。 ・成績上位者に対しては、難関大学対策として英語・数学の講座を定期的に開設した。また成績不振者には、教科面接を実施し、また定期考査後や長期休業前に特別補講を実施するなど、生徒の多様化に対応した指導を心がけた。 ・担任が、クラスの生徒を対象に年間6回以上の個人面接を実施し、個々の学力や生活実態に応じて学習の取り組み方を指導した。 ・平日の学習時間は、4月、9月とも3時間 ・平日4時間以上学習している生徒は、4月で15.0%、9月で11% ・平日2時間未満は、4月で10.3%、9月で10%		
	1年 ・新入生合宿で本校生にふさわしい生活習慣・学習習慣の土台を身に付けさせた。 ・始業5分前には着席を完了し、授業の準備を早めに取りくむよう指導することにより、授業		

	への集中を高めることに努めた。 ・長期休業中の学習については、課題を精選した必修課題と自ら課題を設定し学問への自発的関与を促す目的の自主課題とに分けて課した。また、生徒には計画をたてさせ、学習時間の取り組み状況を記録させるとともに、また振り返っての評価を行い、次の長期休業中に向けて改善点を考えさせた。 ・生徒が計画的に学習に取り組むことができるよう、各教科から授業の進度表やテストの出題予定表などを早くから配付した。 ・成績不振者への特別指導に重点を置き、教科面接・質問教室などきめの細かい指導に努めた。また、上位者への添削などの個々の生徒の学力に応じて取り組み方を工夫した。 ・平日の学習時間は、4月3.6時間、9月3.3時間 ・平日の学習時間が4時間以上の生徒は、4月 36.2% 9月 21.1% ・平日の学習時間が2時間未満の生徒は、4月 1.8% 9月 7.5%						
評価	<table border="1"> <tr> <td>A</td><td> 《互見授業》 ・各教科において2回以上の互見授業と教科別協議会が実施され、その概要が報告されている。 </td></tr> <tr> <td rowspan="3">C</td><td> 《学習時間の確保》 3年 ・2年次に比べ、全体的に学習時間は伸びた。また、4月から9月にかけては平日で平均36分の学習時間の増加が見られた。教科の内訳を見ると、1学期はまだ英・数・国中心の学習だったが、2学期になって理科・社会にかける時間がかなり増えてきた。 </td></tr> <tr> <td> 2年 ・昨年度に引き続き、課題を精選し、量を減らし、自主的な学習を促した。そのためか平日の学習時間が英語、数学で減少した。しかし、4月調査と9月調査を比べると土日の学習時間が増えたため、週あたりの学習時間合計も増加した。また、地歴、理科への意識が少しずつ高まってきている。 </td></tr> <tr> <td> 1年 ・4月には新入生合宿の効果により目標に近い成果が得られたが、9月には休み明けの中だるみからか、目標を大きく下回った。学年集会などで生活の見直しを指導した。 ・長期休業中の学習については、夏休みと冬休みを比べると、学習時間や課題の提出状況に改善がみられている。 </td></tr> </table>	A	《互見授業》 ・各教科において2回以上の互見授業と教科別協議会が実施され、その概要が報告されている。	C	《学習時間の確保》 3年 ・2年次に比べ、全体的に学習時間は伸びた。また、4月から9月にかけては平日で平均36分の学習時間の増加が見られた。教科の内訳を見ると、1学期はまだ英・数・国中心の学習だったが、2学期になって理科・社会にかける時間がかなり増えてきた。	2年 ・昨年度に引き続き、課題を精選し、量を減らし、自主的な学習を促した。そのためか平日の学習時間が英語、数学で減少した。しかし、4月調査と9月調査を比べると土日の学習時間が増えたため、週あたりの学習時間合計も増加した。また、地歴、理科への意識が少しずつ高まってきている。	1年 ・4月には新入生合宿の効果により目標に近い成果が得られたが、9月には休み明けの中だるみからか、目標を大きく下回った。学年集会などで生活の見直しを指導した。 ・長期休業中の学習については、夏休みと冬休みを比べると、学習時間や課題の提出状況に改善がみられている。
A	《互見授業》 ・各教科において2回以上の互見授業と教科別協議会が実施され、その概要が報告されている。						
C	《学習時間の確保》 3年 ・2年次に比べ、全体的に学習時間は伸びた。また、4月から9月にかけては平日で平均36分の学習時間の増加が見られた。教科の内訳を見ると、1学期はまだ英・数・国中心の学習だったが、2学期になって理科・社会にかける時間がかなり増えてきた。						
	2年 ・昨年度に引き続き、課題を精選し、量を減らし、自主的な学習を促した。そのためか平日の学習時間が英語、数学で減少した。しかし、4月調査と9月調査を比べると土日の学習時間が増えたため、週あたりの学習時間合計も増加した。また、地歴、理科への意識が少しずつ高まってきている。						
	1年 ・4月には新入生合宿の効果により目標に近い成果が得られたが、9月には休み明けの中だるみからか、目標を大きく下回った。学年集会などで生活の見直しを指導した。 ・長期休業中の学習については、夏休みと冬休みを比べると、学習時間や課題の提出状況に改善がみられている。						
学校評議員の意見	《互見授業》 ・マンネリに陥らないようするとともに、教員間での意見交換が腹藏なくできる雰囲気作りが大切である。 ・生徒が興味・理解を深めることができる魅力ある授業を期待する。 《学習時間の確保》 ・個々の学習理解の程度に応じた指導を継続して欲しい。 ・学習につまずく生徒には、面接や質問教室などでの配慮をお願いしたい。						
次年度へ向けての課題	《互見授業》 ・互見授業が形骸化することなく、目的意識やテーマを持って実施できるような体制を考えていきたい。 《学習時間の確保》 ・生徒が課題達成の成就感が味わえるよう、課題の質・量についてさらに検討する必要がある。 ・自主的・主体的に学習に取り組む姿勢を育てることが大切である。 3年 ・課題に頼らず、自分で教材を選び計画的に学習を進めていく姿勢および全教科バランスのとれた学習を促す必要がある。そのためには早い学年からの具体的な指導が必要である。自分の時間があるだけでは時間の使い方に戸惑う生徒もいたようだ。 2年 ・課題に頼らず、自主的に発展学習および苦手克服に取り組む姿勢を育てることが大切である。下位層への指導にさらなる工夫が必要である。 1年 ・早い時期から高き目標を持たせ、一生懸命に頑張る生徒を作るためにも、切磋琢磨させるホームの雰囲気づくりが必要である。						

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

(様式5)

平成26年度 富山中部高等学校アクションプラン			－ 2 －
重点項目	進路意識の高揚と進路希望の実現		
重 点 課 題	○自己の将来像に連なる進路意識を醸成し、進路希望の実現をはかる。 ○より難関を目指す進学意識を育成する。		
現 状	○全員が大学への進学を希望している。 ○自分の夢や希望を具現化するために、意欲的に情報を収集し活用する姿勢に欠け、進路選択が遅れる生徒が増加傾向にある。 ○大学等と連携した探究的な学習活動・体験の機会を活用する工夫が必要である。		
達 成 目 標	①大学探訪・進路講演会に満足した生徒の割合	②希望する進路の実現を果たした生徒の割合	
	大学探訪 … 90%以上 進路講演会 … 80%以上	50%以上	
方 策	○多様な進路希望を持ち、選択の指針を必要とする2学年生徒に対し、事前に希望を集約して、要望の多い分野から講師を招き、10分野以上の分科会を設置し実施する。また、生徒が具体的に進路を考えられるように、講師は生徒にとって身近な存在として、本校卒業生を主に依頼する。 ○進路や生き方を考える講演会を1学年で行う。		
達成度	・大学探訪（2年） 95.4% ・進路講演会（2年） 93.3%	第1志望校の合格率 42%	
具体的な取組状況	1年 ・卒業生（大学生）を招いての「進路を考える懇談会」を実施し、大学・学部の特徴や高校時代の学習法や進路決定の経験などを話してもらうことで、文理選択の一助とした。 なお、実施後のアンケートでは「大変参考になった」と「参考になった」が合わせて96.0%であった。 ・本校OGで現昭和女子大学学長の坂東 眞理子氏を招いて「1学年講演会」を実施し、生徒自らが自分の生き方を考える機会を持つと共に進路意識の高揚を図った。加えて、探究科学科では、立山野外実習、能登臨海実習、歴史施設見学および基幹探究報告会を実施することによって探究心を養った。3月には、科学に関する英語力を養うことを目的にイングリッシュ・サイエンスキャンプを予定している。		
	2年 《大学探訪》 ・東京方面、金沢大学への大学探訪を実施した。 ・東京方面（東京大学・お茶の水女子大学・東京工業大学）は、7月23日～24日の1泊2日で155名が参加した。施設見学、模擬授業、大学の概況説明などを受けたほか、宿泊先では、OBによる懇談会を実施した。昨年度と同様に、本郷キャンパスでは大学院生を活用し、研究室の見学会も実施した。 ・金沢大学は、124名が借り上げバス利用で8月8日のオープンキャンパスに参加した。（申込みは学校一括） 《進路講演会》 ・講演会は分科会形式で行い、生徒は希望する2分野の講演を聴いた。 ・生徒の希望する分野についてアンケートを行い、その結果を参考に法律、行政、報道、経済、教育、理工、薬学、医学、農学等の分野の11分科会で実施した。 ・生徒に司会進行、記録、誘導を務めさせ、事前に質問アンケートを取るなど、参加意識を高める工夫をした。		
	3年 《進路の実現》 ・こまめな面接指導、個別指導を通じて、各生徒の進路指導に努めた。 ・難関大学対策説明会を2回開いて、より高い進路志望を持ち続けるように指導した。 ・成績上位者を対象に難関大学講座を開講し、発展的な学習に取り組ませるとともに、「国公		

	立二次対策講座」や「基礎講座」を開設し、生徒個々に応じた指導を図った。 ・全教科において、教員全員で分担し個別大学添削指導を行った。 ・読書の時間を利用した「小論文対策」問題演習を実施した。				
評価	<table border="1"> <tr> <td>A</td><td> 《大学探訪》 ・東京方面の大学探訪は、実施後明らかに進路意識が高まり、非常に有意義な訪問であった。特にOB・OGとの懇談会は、大学生活や学習方法を学ぶ絶好の機会となり、例年同様に大変好評であった。今年度も大学院生を活用して、各研究室の見学会を行ったが、大学での研究の一端を垣間見ることができた。OB・OGに協力してもらうことは生徒の意欲を高めるために有効だと考えられる。 ・今年度は、自主的にオープンキャンパスに参加するように促したこともあり、東北大学の大学探訪と富山大学の一括申込を実施せず、金沢大学のみ学校で一括申込みをし、実施した。多くの生徒が参加し、貴重な体験をした。 《進路講演会》 ・生徒の進路希望を参考に文系・理系にわたる幅広い分野の講師 11 名を招き、実施した。進路意識や職業観を高めることができた。また、高校時代に何をすべきかを真剣に考えさせるきっかけとなった。 ・司会進行、記録を生徒が行うことで、参加意識が高まった。 ・記録及びそれに関するアンケートによれば、深く感銘を受けて、自分の進路を考える契機になった生徒が多く、目標が達成された。 </td></tr> <tr> <td>B</td><td> 本年度の国公立大学合格者数(現役)は、東京大学 15 名をはじめ計 182 名で、全体の 68 % になり、最後までよく健闘した。ただし、思うように成績が伸びず、第 1 志望校を断念した生徒もあり、センターテスト前に行われた第 4 回進学委員会における志望大学の合格を果たした生徒の割合は 50 % に届かなかった。 </td></tr> </table>	A	《大学探訪》 ・東京方面の大学探訪は、実施後明らかに進路意識が高まり、非常に有意義な訪問であった。特にOB・OGとの懇談会は、大学生活や学習方法を学ぶ絶好の機会となり、例年同様に大変好評であった。今年度も大学院生を活用して、各研究室の見学会を行ったが、大学での研究の一端を垣間見ることができた。OB・OGに協力してもらうことは生徒の意欲を高めるために有効だと考えられる。 ・今年度は、自主的にオープンキャンパスに参加するように促したこともあり、東北大学の大学探訪と富山大学の一括申込を実施せず、金沢大学のみ学校で一括申込みをし、実施した。多くの生徒が参加し、貴重な体験をした。 《進路講演会》 ・生徒の進路希望を参考に文系・理系にわたる幅広い分野の講師 11 名を招き、実施した。進路意識や職業観を高めることができた。また、高校時代に何をすべきかを真剣に考えさせるきっかけとなった。 ・司会進行、記録を生徒が行うことで、参加意識が高まった。 ・記録及びそれに関するアンケートによれば、深く感銘を受けて、自分の進路を考える契機になった生徒が多く、目標が達成された。	B	本年度の国公立大学合格者数(現役)は、東京大学 15 名をはじめ計 182 名で、全体の 68 % になり、最後までよく健闘した。ただし、思うように成績が伸びず、第 1 志望校を断念した生徒もあり、センターテスト前に行われた第 4 回進学委員会における志望大学の合格を果たした生徒の割合は 50 % に届かなかった。
A	《大学探訪》 ・東京方面の大学探訪は、実施後明らかに進路意識が高まり、非常に有意義な訪問であった。特にOB・OGとの懇談会は、大学生活や学習方法を学ぶ絶好の機会となり、例年同様に大変好評であった。今年度も大学院生を活用して、各研究室の見学会を行ったが、大学での研究の一端を垣間見ることができた。OB・OGに協力してもらうことは生徒の意欲を高めるために有効だと考えられる。 ・今年度は、自主的にオープンキャンパスに参加するように促したこともあり、東北大学の大学探訪と富山大学の一括申込を実施せず、金沢大学のみ学校で一括申込みをし、実施した。多くの生徒が参加し、貴重な体験をした。 《進路講演会》 ・生徒の進路希望を参考に文系・理系にわたる幅広い分野の講師 11 名を招き、実施した。進路意識や職業観を高めることができた。また、高校時代に何をすべきかを真剣に考えさせるきっかけとなった。 ・司会進行、記録を生徒が行うことで、参加意識が高まった。 ・記録及びそれに関するアンケートによれば、深く感銘を受けて、自分の進路を考える契機になった生徒が多く、目標が達成された。				
B	本年度の国公立大学合格者数(現役)は、東京大学 15 名をはじめ計 182 名で、全体の 68 % になり、最後までよく健闘した。ただし、思うように成績が伸びず、第 1 志望校を断念した生徒もあり、センターテスト前に行われた第 4 回進学委員会における志望大学の合格を果たした生徒の割合は 50 % に届かなかった。				
学校評議員の意見	《大学探訪・進路講演会》 ・ともに良い成果が上がっているが、随時見直しをすることが重要である。 ・目標が定まり、学習意欲も高まる。 《進路の実現》 ・早期の意識付けとモチベーションの維持が大切である。 ・本人の希望と適正を勘案して指導をしていただきたい。				
次年度へ向けての課題	《大学探訪》 ・東京方面の大学探訪は、一橋大学の前期試験と日程が重なり、一橋大学は、訪問を断られた。東工大も同様に卒業生の参加が少なかった。以前と比べて大学側の制限が厳しくなっている。東京大学では、本校OBである理学部の織田先生のご尽力により、施設見学や講義室確保が可能になっているが、今年度で退官されるので今後、誰にお願いして便宜を図ってもらうかが課題である。4 年生や大学院生にお願いして、できる限り生徒に研究室を見学させる試みを始めているが、このようにOBの力を借りることが、より一層重要になると思う。今年度は、企業見学をやめ、一泊二日で実施した。 ・東北大学、富山大学などへは、生徒自ら自主的に申し込み、オープンキャンパスに参加したようである。特別なトラブルは無かった。 ・金沢大学のオープンキャンパス参加希望は、高校からのメール一括申し込みになっている。各学部、学科見学に人数制限を設けているため、早めの申し込みと担当者との密な連絡が必要だと思われる。 《進路講演会》 ・講師の選定に関して、PTA 役員との打ち合わせを、昨年同様 8 月下旬に 1 度行った。適切であったと思う。 ・講演後の記録内容のチェックを講師にしてもらうことはかなりの労力を要するが、今後必要であると思われる。 《進路の実現》 ・より早い学年から難関大学に向かうグループ作りが必要である。 ・今年度から浪人生対策に本格的に取り組み、浪人生においても東京大学 12 名をはじめ多くの生徒が難関大学に合格した。現役時から最後まであきらめず、より高い志望を持たせる工夫が必要である。 ・添削指導の時期、方法を教員全体でさらに研究していく姿勢が必要である。				

評価基準 A 達成した B ほぼ達成した C 現状維持 D 現状より悪くなった

(様式5)

平成26年度 富山中部高等学校アクションプラン			－ 3 －
重点項目	読書指導・体力の向上		
重 点 課 題	○読書指導を充実し、図書館利用の広報周知を行う。 ○体力の向上に努めさせる。		
現 状	○生徒には、読書を通じて自らの生き方や社会のあり方などを思索する時間が必要であるが、学校生活が多忙化し、なかなか読書の時間が取れていない状態である。 ○諸行事等が多く、特別授業期間に十分に読書の時間を設定することが困難になってきている。 ○体力の低下が危惧される生徒が増えてきている。		
達 成 目 標	①生徒への読書、図書館利用を促す広報刊行物の年間配布回数及び読書時間数	②2年次において持久走の自己最高記録を更新した生徒の割合	
	広報活動10回以上、読書の時間年間15時間以上（1・2年）	70%以上	
方 策	○図書の広報刊行物を月一回以上発行する。 ○読書の時間を計画的に確保する。また、年2回読書会等を行う。 ○読書教養講座の実施や「本の虫」などの発行をととして図書委員による主体的な活動を行い、図書館への理解を深める。	○全学年、体育の授業時に毎時10分間程度のサーキットトレーニングを実施する。 ○前年度の自己記録を参考に今年度の自己目標を明確にし、体育の授業や部活動等で意欲的なトレーニングに結びつける。	
達成度	・広報活動15回以上 ・読書の時間15時間以上	80%	
具体的な取組状況	《広報活動》 ・図書委員会の活動と書籍を紹介する特集冊子「本の虫」を10月に全生徒に配布した。また、本の感想や図書館の新着本の紹介をする「図書館だより」を10回教室に掲示した。職員室前と図書館前に「新着本案内」を月に2～3回掲示した。 ・1学期に読書教養講座、2学期の文化祭に企画展（中部高生の読書実態についての調査）を行い、3学期には図書館誌「富山中部図書館」を発行し、全生徒に配布した。 ・新入生に対しては、入学式直後のLHの時間を利用して、図書館オリエンテーションを行っている。		
	《読書運動》 ・2月に1年と2年の読書会の記録である「ひとりで読むよりも」を発行し、教室に配布した。 ・3学年生徒に対して、「小論文対策参考図書案内」を作成し、小論文が必要な生徒の一助としている。		
	《体力の向上》 ・体育理論でトレーニングの原理・原則を理解させ、トレーニング効果を効率よく上げるようにした。通年でランニングと筋力トレーニングを組み合わせたサーキットトレーニングを実施した。		
評価	A	《読書指導》 ・全教職員の共通理解のもと読書指導の充実が図られ、図書館の利用にもつながっている。	
	A	《体力の向上》 ・各自の目標記録を明確にすることで、より計画的・意欲的に取り組めた。 ・サーキットトレーニングで、トレーニング効果を意識することでモチベーションが高くなり総合的に体力を高めている。	
学校評議員の意見	《読書指導》 ・論理的思考には国語力は絶対必要である。 ・図書館活用の促進策を講じることが重要である。		
	《体力の向上》 ・青白いインテリではなく、健全なる肉体を併せ持つ知性派が輩出させることを期待する。 ・トレーニングの原理や原則を理解させ、その効果を意識することは有効である。		
次年度へ向けての	《読書指導》 ・新校舎の建設に伴って、図書館は教室棟から渡り廊下を経由しなければ来館できなくなり、昨年度までに比べて移動距離が長くなっている。そのため、本が好きで毎日利用するような		

課題	生徒の利用頻度に変化はないが、近かったので何となく利用していた生徒の利用頻度は落ちてきている。今後は、このような生徒の利用を増やし、図書館のファンになってもらうことが課題である。 読書の時間では、多様化した生徒の興味関心や読むスピードの個人差により、配布した図書を読み終えられない生徒もいる。入学早々の1学年の必読図書については十分に精査し、本を読み切るという意識付けが大切である。
	《体力の向上》 - 記録向上のための具体的な方策を指導する。 - 個人の体力に応じて、運動負荷を増加設定する（回数・時間短縮等） - 自己の課題を把握し、積極的に取り組む姿勢の育成をはかる。 - より効果的な運動となるようにトレーニングの原理や原則などの体育理論を充実させる。

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

(様式5)

平成26年度 富山中部高等学校アクションプラン		－ 4 －
重点項目	学校行事・部活動の充実	
重 点 課 題	○体育大会をより充実させる。 ○部活動を充実させる。	
現 状	○体育大会へのあこがれが、本校への志望理由の一つになるなど、体育大会は、本校最大の行事として知られている。また、体育大会を通じて、生徒たちは人間的に大きく成長している。 ○全校生徒に対していずれかの部に所属するよう勧めている。生徒は、学習と部活動の両立に、懸命に取り組んでいる。	
達 成 目 標	①体育大会に充実感を持つ生徒の割合 ＊大会終了後に生徒会によるアンケートを実施し、充実度を測る。	②部活動に充実感を得た生徒の割合 ＊3年生全員を対象に、8月下旬にアンケート調査を実施し、充実度を測る。
	80%以上	70%以上
方 策	○体育大会の競技種目や応援の仕方について、生徒会を中心に改善を常に図る。 ○競技種目の練習や準備活動が行き過ぎないよう、適切な指導を行う。	○部活動への参加を積極的に促す。 ○限られた時間の中での、効率的な練習や活動を普段から考えさせる。 ○個々の生徒が、学習と部活動のバランスが取れるよう、ホーム担任と部顧問が連携を取って指導する。
達成度	98.3%	88.5%
具体的な 取組状況	《体育大会》 ・全体練習は10日間、リーダー活動は19日間を設定した。 ・前年度の河川敷グラウンドでの大会運営の反省点を踏まえつつ、関係各部と連携しながら会場整備や備品準備を入念に行った。 ・河川敷グラウンドや第一・第二体育館に加え、新グラウンド予定地の半分を使用し、練習場所を確保した。 ・これまでの伝統を受け継ぎながらも、1年生の団分けや名簿登録の仕方など、基準を明確にし、不公平感のないルール作りをした。 ・大会当日や練習時に怪我や事故がないように細心の注意を払い、また緊急の場合に備えての体制を整えた。 ・保護者の車での上校や入校時刻の制限を行い、大会の円滑な運営を目指した。	
	《部活動》 ・全生徒が何らかの部に所属するよう指導を行った。 ・学習と部活動の両立のため、活動後の下校時刻を遵守するよう指導した。 ・スポーツエキスパート（7人）を招き、部活動の充実を図った。 ・新部室使用に伴い、週2回担当部活動の生徒が清掃を行うよう指導した。	
評価	A	《体育大会》 ・98.3%の生徒が満足しており、生徒全員が一致協力して運営にあたり、本校最大の行事を創りあげるという目標は十分に達成している。 ・不満足の原因として、部活動の練習時間の不足や学習との両立の困難さをあげる者が多い。 ・2年続けて河川敷グラウンドを使用することで、計画・運営を効率的に行うことができた大会であった。
	A	《部活動》 ・8月下旬に行ったアンケート結果によれば、88.5%の生徒が本校の部活動に満足しており、目標は十分に達成している。 ・不満足の原因としては、学習との両立が困難なこと等があった。 ・7限授業週2日制であることに加え、多くの行事や活動が放課後の時間帯にわたるため、部活動の時間が不足している。 ・SS部創設と共に、研究発表という新しい領域に積極的に取り組もうとする生徒が増えた。 ・運動部、学芸部が活発に活動を行い、多くの部が北信越大会や全国大会に出場し、成

	果を上げた。
学校評議員の意見	《体育大会》 ・生徒の主体性、集中力、協調性、団結力等の育成にとって大変効果のある行事である。今後も継続して欲しい。
	《部活動》 ・文武両道を貫き各種大会での活躍は大変素晴らしい。 ・短い活動時間、少ない練習量の中で、最大の効果が得られるよう生徒の意識や集中力を向上させる工夫を期待する。
次年度へ向けての課題	《体育大会》 ・練習中の怪我を防止する方策を引き続きすすめていく必要がある。 ・9月当初に各部の大会が多く、部活動時間の確保の観点からも、運営についてさらに検討を進める必要がある。 ・新グラウンド完成に伴う体育大会の運営方法を、競技規定の見直しを含め、検討する必要がある。
	《部活動》 ・学習と部活動の両立に悩む生徒が多いため、学年と各部活動顧問が一層の連携を図ることが必要である。 ・新校舎での部室確保や活動場所には限りがあり、対策を講じなければならない。 ・本校の部にはない競技選手が増え、その競技団体との関わりや大会引率などの業務がこれまで以上に必要となっている。

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

(様式5)

平成26年度 富山中部高等学校アクションプラン			－ 5 －
重点項目	「探究力」「科学的思考力」「自己発信力」の育成		
重点課題	○SS事業を計画的に運営・実施する。 ○海外研修により国際交流、学術交流を深める。		
現状	○これまで理数科、探究科学科では野外実習や課題研究等のさまざまな活動を通して、生徒の学問的な探究心の向上を図ってきた。本年度、スーパーサイエンスハイスクールに指定されたことによって、これまでの活動を継続・発展させるとともに、理数科学科に重点を置いた事業を通して「探究力」等を育成する指導法ならびに評価法を開発する。 ○平成11年度より継続してきた中国遼寧省との交流に加えて、本年度7月に第1回となるアメリカ海外研修を実施する。これらの研修等を通して、グローバル社会で将来活躍する人材の育成を目指す。		
達成目標	①野外実習、大学実習、課題研究に対するそれぞれの満足度 *各実習ならびにSSH成果発表会後に実施するアンケート	②第1回海外研修（アメリカ）に参加した生徒の充実感および保護者の肯定感の割合 *帰国後の事後研修で実施するアンケート	
	各90%以上	参加生徒の充実感 80%以上 保護者の肯定感 70%以上	
方策	○野外実習や大学実習については、実習の内容や方法等について十分に打合せを行ない、生徒が興味関心を抱き、積極的に実習に参加できるよう工夫する。 ○発展探究発表会（校内中間）、三校合同発表会（全国プレ）、SSH成果発表会（全国）の位置付けを明確化し、ルーブリックによる評価を取り入れながら研究内容の充実を図る。	○事前研修を効果的に組み立て、研修の目的・研修内容を明確にし、参加者が各自の研修課題を持つように促す。 ○事後研修を行い、研修後の英語力の伸びをはかる。また、今後の自分はどうかを各自が考え、それを実行に移そうとする姿勢を育てる。	
達成度	・野外実習の満足度 98% ・大学実習の満足度 92% ・課題研究の満足度 95%	・参加生徒の充実感 98% ・保護者の肯定感 100%	
具体的な取組状況	《SSH》 ・野外実習は、立山自然観察実習（40名）と能登臨海実習（40名）に分かれてともに事前研修、事後の合同発表会を行った。実習では、ともに大学の先生、ナチュラリスト、大学院生のTAに指導により、きめ細かい実習を行った。 ・大学実習では、大学の担当者と綿密な打ち合わせを行い、東京大学15名、富山大学30名、富山県立大学20名参加した。文化祭で実習内容を発表し、内容をレポートにまとめ、実習の記録集を作成した。		
	《海外研修》 ・事前研修は最終的に10回行った。訪問大学・研究施設についてのリサーチ、英会話演習、現地で滞在する際に必要とされる一般的知識の確認、地理の教員による講義、自己研修課題の設定など、10回の研修中で自分が何をどんな方法で学ぶのかということを確認にした。また、研修中、各自がグループの中でどのような役割を果たして自主性を育てるのかを考えた。 ・事後研修は2回行った。CASEC TESTにより研修後の英語力を測ったり、今後自分はどんなことに取り組んで自分の目標を達成していくのかという方向性をふり返りシートで確認した。また、自己研修課題についての成果をまとめ、第1回海外研修報告書を作成した。		
評価	A	《SSH》 ・2年生の理数科学科では、実験結果をまとめて発表する機会が何度もあったことから、生徒のセルフアセスメントによる達成率が95%、ルーブリックを用いた教師側から見た評価達成率では、表現力・発表力が91%、まとめる力が90%を示しており、探究力の中の「プレゼンテーション能力」の達成率が高い。今後は、その他の能力の向上にもつなげたい。	
	A	《海外研修》	

	・研修後、研修生達は自ら発信することの重要性を切に感じ自発的に生徒会役員・クラス委員になったり、自分が得意とすることにさらに集中して取り組もうとしている。また、意欲的な姿勢を学校内に広げる担い手になりたいと考えている。事後研修に行った参加者・保護者へのアンケートでは、高い充実感・肯定感を示し、保護者からのコメントには、本人の進路意識が高まったり、明確になったようだとの意見をいただいた。
学校評議員の意見	《SSH》 ・探究科学科の狙いと一致するものがあるので、生徒・職員の負担を配慮しつつ今後とも成果をあげて欲しい。 ・探究活動や研究発表を通して、一人一人の能力向上や主体性の向上などを評価し、全員が成長を感じることできるようになることが大切である。
	《海外研修》 ・米国研修は素晴らしい成果をあげている。今後も継続するとともに、研修を通してさらなる学びの充実を期待する。 ・グローバル化は世界の流れであるので、随時改善と見直しを図って、より良い活動に育てて欲しい。
次年度へ向けての課題	《SSH》 ・評価法を見直し、探究力の「課題設定力」「仮説形成力」「課題解決力」の評価ができるようにし、その能力を伸ばしていく指導法をさらに開発していきたい。
	《海外研修》 ・第1回研修の日程・訪問先・経費・移動手段などをもう一度見直し、改善点があれば随時見直していくべきである。また、事前研修・事後研修についても訪問先に応じて内容を考慮し、研修が有意義なものになるような検討を継続していく必要がある。

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった